

漢字教育への反対論

幼児教育者たちが幼児の漢字教育を受け入れない最大の理由は「幼児期に漢字を習得しても小学校に進めば、幼児期に漢字を学習しなかったものと、全く同じになってしまう」という意見があることによる。そしてその意見を出したのが黒田実郎氏ということになっている。

正直に言って、私は黒田氏の発表を読んだ時、この発表が、幼児の漢字教育に反対する人たちの唯一の拠り所になろうとは、夢にも考えなかった。氏は「幼児期の漢字教育は無意味である」とは一言も言っていない。

黒田氏の発表は、昭和 47 年 5 月 13 日大阪樟蔭女子大学における日本保育学会第 25 回大会でなされ、それはその時の研究発表論文に掲載されている。今、改めてこの発表を読んでみても、どうしてこれが反対論の根拠になるか、私には解らない。

この発表は、「幼稚園における漢字教育の効果に関する追跡研

究」という標題で、副題に「認知能力の発達の観点から」と記されている。従って、この研究は「幼稚園における漢字教育が、幼児の認知能力にどのような影響を及ぼすか」について問題を提起したものであることが解る。

そして、本文には、「調査開始時には見られなかった両群の差(筆者注・図形テストを、漢字教育を実施している幼稚園とそうでない幼稚園の幼児に対して実施した所、両者に差がなかったことを指す)が、約一年後に至って統計的にも有意に認められた」という事実を述べ、「この結果から、漢字教育が図形テストで測定されるどころの推理、知覚、空間因子の発達面で効果を示すものではないか」という問題を提起しているのである。

つまり、黒田氏の発表は、「幼児の漢字教育は無意味である」というどころか「効果があった」とはっきり言っているのである。この発表の趣旨は、漢字教育の効果を述べるものであって、否定するものでは断じてない。